

平成23年(ワ)第1291号・平成24年(ワ)第441号・平成26年(ワ)第516号伊方原発
運転差止請求事件

意見陳述書

2013年10月29日

松山地方裁判所民事第2部 御中

原告 望月佳重子
(愛媛大学法文学部 名誉教授)

私は昨年、30年あまり勤めた愛媛大学法文学部を定年退職しました。山梨県に生まれ、アメリカに2回留学し、東京で大学院を終え、松山で就職です。就職の当初は、あまりの文化ショックのため『じょうちゃん』という軽薄な小説を書き、すぐに東京に戻るつもりでした。しかし今は、3つの理由から松山に住もうと決めています。1つ目の理由は、私の「英米女性文化論」ラボを選んでくれたゼミ生院生たちが、よく訪れてくれること。2つ目は、職場で長く人権問題への対応システムづくりと法整備に追われた結果、今なおセクハラ被害者たちをケアしていること。3つ目が、基本的人権としての平和な生活のため、その廃止を願う、伊方原発です。

ゆえに本日は、伊方原発の運転差止を求めて、人文科学を研究する者の視点から、意見を述べます。

概要で、三本の柱を建てました。I では、井伏鱒二の小説『黒い雨』を、もっと多くの方々が精読して下さるよう、私の注目点を述べます。

柱の II には、先住アメリカ人が出てきます。インド人ではないのに、インディアンとも呼ばれます。そもそも私の研究テーマの英米女性は、金髪碧眼のキャリアウーマンや「家庭の天使」ではありません。近代植民地主義によって、正当とは言えない利益を得たイギリスとアメリカで、少数民族「化」された人々、例えば、インド系イギリス人、先住アメリカ人、アフリカ系アメリカ人などの女性です。日本の学会では、まだ人気が無いテーマですが、この人々から、私は危機と苦難を生き延びる歴史、思想、技術を学んできました。

最後の III では、愛媛大学原発研究会の学生たちと顧問の私が傍聴した、伊方原発「2号機訴訟」について、次に、現在その学生の一人が秀でた中年となり、3.11 後に八王子で立ち上げた、放射能測定の市民「広場」について語ります。

概要

I 井伏鱒二『黒い雨』（1966）

1. 優れた女性像（シゲ子、矢須子）と「多声の」語り
2. 国際的評価と国内的不可視化 ←→ 第五福竜丸事件の不可視化

II レスリー・シルコウ¹『儀式』（1977）²

1. "human beings [are] one clan again ... united by a circle of death"
「人間は再び一族だ・・・死の円環で結ばれた」
2. 先住アメリカ人指定居留地のウラン鉱山（ニューメキシコ州）

III 愛媛大学原発研究会『反原発 怒りの鉄ペン』（1981）

1. 伊方原発「2号機訴訟」と住民からの学び：
矢野浜吉さん、広野房一さん、斎間満さん³
2. 八王子市民放射能測定室「ハカルワカル広場」⁴（2012）

I 井伏鱒二『黒い雨』（1966）

1. 小説『黒い雨』は、原爆投下という極限の暴力と悲惨を描きながら、巷に生きる一人ひとりの尊厳を伝えます。例として、簡便な粗筋からでは見えにくい2人の女性像、閑間重松の妻シゲ子と養女の矢須子を紹介します。

シゲ子が身を粉にして調達する僅かな、僅かな食物についての精緻な日記と、矢須子が原爆を体験する凄絶な日記は、彼女たちの知性と、誠実に真っ直ぐに他者と関わる力と、両方を伝えます。重松はあの状況下で、二人のユーモアのセンスさえ記録しますが、矢須子は養父母の安否を気づかい、広島郊外から市内に戻り、「黒い雨」に打たれて内部被曝します。

¹ 1946生の女性作家：アメリカ南西部、ニューメキシコ州の先住アメリカ人、ラグーナ・プエブロ民族。ロスアラモス研究所に遠くない地に住む。

² Leslie Marmon Silko, *Ceremony* (1977), New York: Penguin Books, 1986. <荒このみ（訳）『儀式』講談社学芸文庫、1998.>

³ 矢野浜吉（1903 - 1995） 伊方原発反対八西連絡協議会、事務局長
 広野房一（1912 - 2005） 伊方原発反対八西連絡協議会、会長
 斎間満（1943 - 2006） 南海日々新聞社、社主

⁴ ハカルワカル広場 <http://hachisoku.org/blog/>

それこそ今、科学的知見として「黒い雨」が再検証され、ABCCによる調査の問題点が指摘され、「福島」では原発事故による内部被曝の精査が急がれています。⁵ 第2回口頭弁論で松浦秀人さんが「原爆と原発は双子」と、最近の講演で早坂暁さんが「原爆と原発は連続」と、強調しました。⁶ どのような形でも「この核」に、人類が触れてはならないのです。小説『黒い雨』では、矢須子という上品な若い女性が一人、緩慢に殺されます。読者の私たちは同時に、14万人が、短時間に核爆発の犠牲となった場面群にも、立ち会わねばなりません。

なぜなら小説『黒い雨』は、シゲ子の声、矢須子の声、子どもたちの声、岩竹医師の妻の声など、極めて多声だからです。重松の独り語りではありません。これが、優れた文学作品を個々の実録とあわせて読むべき理由の一つです。むろん、この地獄物語からは、夥しい死者の声も聴こえます。⁷

2. ところで『黒い雨』について、9年前、ギリシャで学会発表⁸した体験を短く語ります。私たちのワークショップに参加した60人ほどは全員、ジョン・ベスターによる『黒い雨』の英語訳⁹を読んでいた。日本語が母語でない、

⁵ NHK スペシャル「黒い雨」(文字起こし版)

http://blogs.yahoo.co.jp/satsuki_327/39958114.html

NHK 追跡「低線量被ばく」(文字起こし版) <http://togetter.com/li/234049>

⁶ ・松浦秀人、平成23年(ワ)第1291号・平成24年(ワ)第441号伊方原発運転差止請求事件、第2回口頭弁論、意見陳述書、2012年9月25日。 http://www.ikata-tomeru.jp/?page_id=904

・早坂暁(講師)「瀬戸内海を殺すな - 海は誰のものか」2013年9月15日、松山市男女共同参画センター。

⁷ 例えば、井伏鱒二は僅か2行で、原爆投下で見殺しにされ相生橋の下に横たわる、アメリカ軍白人捕虜の姿も描いている。『黒い雨』(新潮文庫版)、113頁。読者は直ちに、朝鮮半島から広島に強制連行された徴用労働者を含む、3万に近い人々の死について考えるよう促される。

⁸ The 4th MESEA (The Society of Multi-Ethnic Studies: Europe and the Americas) Conference, “Ethnic Communities in Democratic Societies,” Thessaloniki, Greece, May 2004.

⁹ Ibuse, Masuji, *Black Rain* (1969), John Bester tr., Tokyo: Kodansha International, 1979. 原書の初版が1966年なので、三年後の出版は早い仕事で、ごく些細な問題点はあるが優れた翻訳。

世界中からの学者ですが、深いコメントと質問が出ました。¹⁰ 一方、私の母国では、周囲の誰も読んでいなかったのです。そうとう悲しく思いました。

読まれない理由は、山下正寿さんが前回陳述された「第五福竜丸事件」と同様、「核」を延命させるため、組織的に不可視化されたからです。¹¹ 『黒い雨』の場合、広島被爆者の日記を井伏が盗作したという酷い中傷を、主に注12の二人がマスコミに流し、ネットで広げ、読者を遠ざけました。¹² 日記は後に別途『重松日記』¹³ として出版され、小説『黒い雨』の盗作疑惑は晴れました。しかし特に東京都知事による中傷は、井伏の名高い短編にさえ及び、論理破綻しているのに、止みません。原爆を忘れさせ、原発を稼働させ、日本を核武装した「強い国」にして、「福島」を忘れさせる言動の一つではないでしょうか。

ところで、井伏自身が原発への意見を述べた、短い随筆に言及します。第二次大戦中、従軍文芸者として共に陸軍に徴用された戦友が、後に技術者の一人息子を原発事故で失った、手記の紹介です。¹⁴ 井伏は、この随筆への「覚え書き」で「人間は絶対に原爆に手を触れてはいけない」¹⁵ と記し、私は一瞬、誤

¹⁰ ホロコーストとしての位置づけ、シンガポールを「陥落させた」記述、実験性の確認、「白虹」と「五彩の虹」の対比、等について。

¹¹ ・山下正寿、前出、第5回口頭弁論、意見陳述書、2013年7月22日。
<http://www.ikata-tomeru.jp/wp-content/uploads/2012/09/130716tinjutyamast.pdf>

・伊東英明(監督) 山下正寿と幡多ゼミ(出演) 劇場映画『(放射能を浴びた) X年後』南海放送(制作)、2012。

¹² 二人：豊田清史、猪瀬直樹(現東京都知事)

¹³ ・重松静馬『重松日記』筑摩書房、2001。
この日記は、それ自体で最高水準の文学作品。当然、井伏の小説は日記と重なるが、似て非なるもの。京都精華大学の中尾ゼミが、『重松日記』の編者、相馬正一に拠る『日記』研究を公開している。
http://www.nakaoelekishack.net/?archives_category=020-journalism-2002a
http://www.nakaoelekishack.net/?post_type=archives&p=103

・井伏と重松の信頼関係、要約：(1) 重松が井伏に、自分の日記を如何ようにも使ってほしいと依頼。(2) 井伏は、せめて共著にと説得したが、重松は固辞。(3) 重松の遺族は15年間、注12の二人の言動に苦しみ抗し、日記と信義を守った。(同上、相馬)

¹⁴ 『井伏鱒二自選全集、第11巻』新潮社、1986、7-11頁。

¹⁵ 同上、396頁。(下線、望月)

植か毫碌か、と不謹慎にも疑ったのでした。実際そんなはずは無く、私たち原告の主張「一字の違い、どちらも地獄」すなわち原爆と原発が双子で連続する犯罪性を、井伏鱒二は早くも1986年に明記したのです。

II レスリー・シルコウ『儀式』（1977）

1. 先住アメリカ人の作家レスリー・シルコウの名作『儀式』は『黒い雨』の11年後、1977年に書かれました。小説の重要な場面で、ニューメキシコ州に住む先住民、ラゲーナ・プエブロ民族の老女が、人類最初の核実験を目撃した朝の話をします。¹⁶ 老女の孫息子テイヨは祖母の語りから、実験の1ヶ月足らず後「ここから1万2千マイルかなたの都市の人々」¹⁷ が、原爆と水爆で如何に死んだか、に思い至ります。

テイヨは、アメリカの美しい過疎地である「ここ」と、「かなた」の日本とを結ぶ「死の円環」すなわち死者を繋ぐ輪“circle of death”¹⁸ に気づきました。彼は重い心の病に苦しむ太平洋戦争の帰還兵ですが、「死の円環」を見極めると、民に伝わる、生きる「儀式」に臨みます。コロンブスの1492年以來、自分の民がアメリカで如何に殺されてきたかを、遠い「かなた」の民に重ね、「死の円環」が示す暴力の構造を、歴史的に地理的に理解したからです。¹⁹

¹⁶ 実験場「トリニティー・サイト」において、1945年7月16日、5時29分40秒。

¹⁷ ・むろんヒロシマ・ナガサキの人々のこと。（訳、望月）

“a circle of death that devoured *people in cities twelve thousand miles away*, victims who had never known these mesas, who had never seen the delicate colors of the rocks which boiled up their slaughter.”

Silko, *Ceremony*, 246. （前出、イタリック体、望月）

・「ここ」は“reservation”（指定居留地）と呼ばれる場所。先住民から移動の自由を奪って囲い込んだゲットー。皮肉にも、ウラン採掘のため立ち退かされた住民もいた。

¹⁸ もう少し詳しくは「死が結ぶ人間たちの輪」

¹⁹ コロンブス以前の先住アメリカ人の人口：少なめの算定で約1000万人
現在の人口：約247万人

Wilbur R. Jacobs, “The Tip of an Iceberg: Pre-Columbian Indian Demography and Some Implications for Revisionism,” *The William and Mary Quarterly*, 3rd Ser., Vol. 31, No.1 (Jan., 1974), 128.

2. シルコウは1953年、自分の故郷ラグーナ・プエブロ指定居留地でウランが採掘され、ウランはロスアラモス研究所のマンハッタン計画で使われ、後に鉱山で働く極貧の同胞“hibakusha”が多数、癌で死んでいることを知りました。小説『儀式』の執筆動機です。国家の「周縁」に追いやられた人々は、「福島」の大多数の人々がそうであるように、暴力構造の核心を見極め、「かなた」で苦しむ他者に共感できるのです。²⁰

もう1つ彼女が知ったのは、核を操る三者すなわち死の商人、無責任な政治家、似非科学者、この三者の「金と利権と保身」による、大地／海／空と人間の魂の汚染です。汚染する側は、1943年、マンハッタン計画に7200億円を投入、これは、1945年に膨れた日本の国家予算214億円の30倍余りです。²¹ 世界最大の露天掘りウラン鉱山で働く先住民は、この数字など知りません。

しかし異常に狂った環境に、先住民の少女と少年たちが「自殺クラブ」で反応した、とシルコウは評論集で記します。²² それも、とびきり育ちと頭の良い高校生が「土曜日にシェリリンが『した』から、今度はあたし」²³と書き置いた、と。そして、大人たちの間には500年来のアルコール中毒が激増し、動

<http://personal.tcu.edu/gsmith/graduatecourse/colonial%20pdf%20articles/jacobs-iceberg.pdf>

²⁰ Kaeko Mochizuki, “Duras, Ibuse and Silko: Narrating Nuclear Destruction in Atomic Societies,” Yiorgos Kalogeras et.al.eds., *Transcultural Localisms: Responding to Ethnicity in a Globalized World*. Heidelberg: Universitätsverlag, 2006, 81-96.

本陳述書のIとIIは、部分的に上記の論文に拠る。

²¹ ・マンハッタン計画予算：20億ドルを約7200億円と換算
(戦後1949年の固定相場、1ドル360円で計算した場合)
20億ドルは、下記ブルッキングス研究所の報告書から。

<http://www.brookings.edu/about/projects/archive/nucweapons/manhattan>

・日本の国家予算(1945)

http://www.geocities.jp/kingo_chuunagon/kikaku/kokuryoku.html

²² Silko, Leslie Marmon, *Yellow Woman and a Beauty of the Spirit: Essays on Native American Life Today*. New York: Simon, 1996, 126-132.

ジャクパイル・ウラン鉱山 “Jackpile Uranium Mine” は、ラグーナ・プエブロ指定居留地内、7つの村の1つ、パグウェイト村にある。近隣のナヴァホ民族からの出稼ぎ労働者も、多くが被ばくした。

²³ 同上 Silko, 131. (訳、望月)く

機の無い殺人事件が頻発した、と。

私は、汚染した側が持つ価値観の頽廃と狂気に、鋭敏な民が「虚無」で反応したのだと思います。このウラン鉱山は、研究の重点がプルトニウムに移り、30年後の1982年に閉鎖されました。²⁴

III 愛媛大学原発研究会『反原発 怒りの鉄ペン』（1981）

1. 伊方原発「2号機訴訟」と住民からの学び：

矢野浜吉さん、広野房一さん、斎間満さん

陳述の最後は、遠い「かなた」から「ここ」愛媛に戻ります。まず学生たちと私の体験を、次に元学生、二宮志郎の活動を語ります。

30年あまり前、7人の学生が原発研究会を結成、「どの教員も引き受けてくれないから」と正直に頼まれ、私が顧問になりました。彼らは自力で調べ議論し、久米三四郎さんから教わり、工学部の原発推進教員たちとも話して、原発は廃止すべきという結論と根拠を、ガリ版刷りの会報『反原発 怒りの鉄ペン』に載せます。会報の題名に、鉄の拳でなくペンを選んだ、陽気でお洒落な連中です。結局、最高の学びを、1号機訴訟と2号機訴訟における伊方住民の方々から得ました。

2つの訴訟を高松と松山で傍聴した学生の二宮は、長老の矢野浜吉さんが、原爆投下に終わった「戦争」と原発の存在とを、許されない暴力として関連づけて裁判を闘った姿勢に、思想の深さを見たと言います。²⁵ 私は、広野房一さんの器の大きさに、斎間満さんの判断力と謙虚さに、圧倒されました。「八西連絡協議会」の人々は、空／海／大地が与える恵みを少しずつ頂き、質素に生きる道を選んだ、と分かりました。

傍聴した2号機訴訟で、忘れられない原告の言葉があります。長期にわたる裁判で「私どもの命が無くなってしまいます」です。本人訴訟をした人々の、飾り気の無い言葉に、私は打たれました。また、大学に出前に来てくれた磯津公害研究若人会は、笑いながら「元」若人です、と現実即して自己紹介し、

²⁴ ちなみに、広島に投下された原爆のウランは、ここのものではなく、今でも露天採掘が続くアフリカ、ナミビアのウラン鉱山のものとされている。

²⁵ 私信に拠る。要約および「生」引用の許可を得ている。以下、同様。

魚にも海藻のアラメにも異変があると教えてくれました。²⁶「八西」の方々は「水俣」の人々に似て、真実に直進して元気でしたが、むろん、老いと共に歩まれました。このシャイで優しい人々の怒りを、学生たちは受け継ぎました。

2. 八王子市民放射能測定室「ハカルワカル広場」(2012)

元学生の二宮志郎は現在、家族と共に東京に住んでいます。サンフランシスコに近いシリコンバレーで情報工学の技術を磨き、その10年間で、個人個人が自分で決めて動く、というアメリカ市民運動の良い理念と実践方法を身につけました。彼は「八西」の方々からの学びを、自分の土台と位置づけています。

21歳だった彼は、当時、原告を露骨に蔑んだ冷酷な人々に怒りを向けました。同時に、理学部物理の学生でしたから、杜撰な調査により原発は安全、環境汚染は無い、と宣言した学者たちの倫理を疑いました。したがって3.11直後「大先生たちのウソを直ぐに見抜けた」と言います。

こうして彼は、公式発表に頼らず、東京郊外の八王子で放射線量を自分たちが計ることにしました。様々な職業の普通の市民が、まず子どもたちを内部被ばくから守る、という強い決意で関わっています。測定室とその周辺は、情報交換と憩いの「広場」になりました。²⁷今は専門の研究者たちも訪れます。更に金曜日の官邸デモに呼応して、穏やかな祭デモを1年前から行っています。²⁸こうして「八西」の方々の命は、若い世代の活動の中で、地方と地方を結ぶ力になっています。

²⁶ 磯津公害研究若人会は、現在も原発沖で「海底の泥の調査を続けて」いる。

²⁷ 例えば「広場」では、南海放送が制作した映画『X年後』(前出)が紹介されている。「ハカルワカル広場で来年のビキニデーに八王子で上映会」を決めた、と広報。高知と愛媛と八王子という3つの地方を結んでフィードバックする「生の円環」"circle of life" が実現している。

<http://hachisoku.org/blog/?p=1152>

²⁸ 毎週金曜日、八王子、「金八」デモ、午後6時。或る夕刻、デモの最中、関わっている市民を疲弊させるのを目的とする、手の込んだ嫌がらせがあり、その手法は分析に値する。同時に、嫌がらせへの粘り強い対応の体験が記録、共有されている。

<http://hachisoku.org/blog/?p=1651>

終わりに

齊間満さんの言葉「原発は決して伊方を豊かにはしなかった。道路や建物は立派になったが、人々の心は傷つき、人間の信頼は失われた」²⁹ は、世界の現状と呼応する真実を伝えています。通信技術が発達した今、多くの「かなた」で、ラゲーナ・ブエブロの民が、世界中のウラン鉱山で働く人々が、廃炉を決めたドイツの人々が、とりわけ過酷な原発事故の犠牲者たちが、「福島」を見つめ、「ここ」伊方の原発を見つめています。

本日、法廷の全てのみなさまに、齋間さんが望んだ「豊か」な町の回復を訴え、原発の廃止を求めて、私の陳述を終えます。

²⁹ 齊間満 『原発の来た町—伊方原発はこうして建てられた／伊方原発の30年』南海日日新聞社、2002年、173頁。